師弟関係，ある権力の構造

Oleanna（1992）を中心に

The Power Structure of *Oleanna*

古山　みゆき*
Miyuki Koyama

序

P.Hubert-Leibler は，彼の論文“Dominance and Anguishi:The Teacher-Student Relationship in the Plays of David Mamet”の中で，教える者と教えられる者の師弟関係が David Mamet の作品の大半に現れていると以下のように指摘している[1]．

> Although at first sight Mamet's urban microcosm-inhabited by rugged, unsophisticated, often inarticlulate men and the school world would seem to be poles apart, relationships of the teacher-student type appear in most of his platy.

American Buffalo（1975）では，古物商の Don が年下の店員 Bobby にビジネスマンの成功の秘訣を教え，*Glengarry Glen Ross*（1984）では，不動産の Levene と同僚の若い Roma は師弟関係にある．

また，彼の劇には職業は教育関係の登場人物も出てくる．例えば，*Sexual Perversity in Cnicago*（1974）では，幼稚園の教諭 Joan が年下の Deborah に，Bernard が若い Dan にそれぞれ男女のことを教える．

だが，『オレアンナ』で，作者は教育界，教師と学生の関係を初めて直接的に描き，劇の主な題材としている．永久在職権の審査を受けている大学講師 John は，女子大学生 Carol に sexual harassement で訴えられ，永久在職権どころか失職してしまう．『アメリカン・バッファロー』のドンが，『グレンギャリー・グレン・ロス』のレヴィーンが自らの仕事に失敗し師としての立場から転落するように，彼の劇で，師が失脚する師弟関係は見られる．しかし，その関係は同性どうしで，『オレアンナ』のそれは異性間のものである．この劇の初めに，民謡の一節が置かれ，それはオレアンナという女性を慕う愛の歌である．劇中にオレアンナという名は出て来ないのに，劇の題にこの名が使われている．これは，作者がこの劇の action を異性の師弟関係とした事と，関係していないのだろうか．異性の師弟関係をここで探り，この作品世界への一つの視点としてみたい．

本　論

1　師弟関係

『オレアンナ』はジョンとキャロルの二人だけの登場人物の台詞劇で，ジョンの研究室という場面は変わらない．彼が彼女への性的嫌がら

*英語専攻

せの嫌疑を受け失脚する事件の，導入，展開そして終結を，三幕のそれぞれの幕が示す．ジョンの妻 Grace と彼の弁護士 Jerry からの電話で，外の世界，主に家庭生活が表される．それによると，ジョンは大学で，助教授昇進，つまり永久在職権許可の審査中で，彼は良い結果を期待して新居を契約しようとしている．幸福な未来を期待していた彼がキャロルに訴えられ教師の地位を追われる過程が，主に登場人物の緊迫した対話で描かれ，目立った彼らの動作や動きは劇の終局まで殆ど無い．

この作品は言葉の力で十分に劇となっていて，特に台詞のやり取りのリズム感はマメット独特のもので，主にそれは，refrain, 強調語, pause つまり間の巧な使い方による．強調語は，登場人物が強調する key word であり脚本では斜体で表記されている．間は，言葉の強調の一種で，登場人物の一人が台詞を中断すると，相手がそれを補って言葉を続け，後に続けられた言葉が観客に，より印象付けられる．例えば，以下の引用は正義についてのジョンとキャロルの対話だが，公正な裁判が正義に関して強調され，それは作品のメッセージのキー・ワードにもなっている[2]．

CAROL:...that all are entitled...(Pause)I...I...I...

JOHN:Yes. To a speedy trial. To a fair trial.

このような優れた対話劇のこの作品で，キャロルは大学当局にジョンの行状を起訴して，彼に「貴方にはもう権力がない」と断言するが，この師弟関係を一つの権力関係と見る事はできないだろうか．

ハーバード・レイブラーは，Michel Foucault が彼の論文，“The Subject and Power”の中で師弟関係を“tight power structures”あるいは“block of capacity-communication power”としていると以下のように指摘する[3]．

Foucault examines the very same pedagogical relationship as an example of the tight power structures he calls “blocks of capacity-communication-power”. The first constituent of the block, variously called “capacity”, “objective capacities” or “finalized activities”, consists of the technical apparatus brought into play in order to achieve a certain goal....The second element of the system, defined as an “ensemble of regulated communications”....The third element of the pedagogical block described by Foucault is a series of power process...

フーコーは教育の三要素として，ある行動の型の習得の為にされる組織的行動，管理的意志伝達，権力手段を挙げている．

またレイブラーは，Roland Barthes の論文，Writers, Intellectuals, Teachers”に触れ，バルトの言う師弟関係を以下のようにまとめている[4]．

Barthes remarks that if the student expects to receive an adequate professional training and acquire knowledg in the course of his apprenticeship, the teacher essentially demands that the student let himself be seduced” and assent to a loving relationship:”...and finally, that the student act as relay,... extend him,...spread his style and ideas far afield.”

バルトは，師弟関係を，学生は教師の与える知識を修得し，教師は自分の代わりにその知識を学生に広める事を要求する利益の交換行為，契約関係としている．それは年齢や知識の面で教師が優位に立つ不平等な権力の構造に基づいた契約関係といえるだろう．

では，『オレアンナ』において，教師ジョンの望む行動の型に，学生のキャロルはどのように教育されているのだろうか．二人の契約関係はどんなものなのか．この二人の師弟関係をあ

る権力関係，契約関係と仮定し考察してみたい．

2　コミュニケーション

フーコーの言う教育の管理的意志伝達には授業，質疑応答，命令など含まれるが，授業では，教師は話す権利をもち学生の発言を管理統制できる．彼の質問に学生は答える義務があり，発言権を得る．教師の質問が，学生の答えの助けになっても，彼の解答は彼の能力評価になり，質疑応答は学生には抑圧的なものになる．学生側からのコミュニケーションは制限されたものだから，彼と教師と相互のそれは対等でありえない．一幕では，キャロルがいかにジョンと意志疎通できないか彼に訴える．彼女は，ジョンの指示どおりに講義のメモを取り，本も読むが，彼の講義内容や言葉も理解できず，自分の能力に自信喪失し落第の不安に駆られる．彼女と教師との意志疎通の無さを，“I don't understand”という彼女の refrain が表す[5]．この作品では，リフレインは登場人物の意志疎通ができない状況を表す重要な技法である．三幕ではキャロルは彼の罪状を話そうとして“I came here to tell you something”と言うし，ジョンは彼女が邪悪であると言おうとして“I want to tell you something”述べて，お互いに意志疎通を希望しそれが出来ない様子が表現されている[6]．

バルトの言う，教師が常に優位に立つ契約である教育にしても，教師は彼以上の人格を創り出す教育が教師という地位を脅かすことを知っているから，彼はその地位確保のため，学生の独立のための自己表現を抑制し，彼らからの真のコミュニケーションを拒否する．作者は，一幕で，キャロルの自己表現が否定される過程を巧みに描きだしている．

3　権力的手段

教育の権力的手段は，報酬，処罰，階級制度などを含み，自動的に教師は学生に対して優位性を持つ．一幕でジョンの難解な授業内容を理解できないという悩みと履修辞退を相談に来たキャロルへの彼の高圧的な対応は，彼女に劣等感を与え，益々彼女の疎外感を強める．知的劣等感に苦しむ彼女に，彼は，幼少の頃からの無能さ，集中力の無さへの劣等感を克服した個人的体験を一方的に語り，彼女には話をさせず彼女の相談にのらない．そのうえ，彼は，彼女には理解できない抽象的な言葉を多く使うのでより彼女は混乱する．以下のように彼が，彼女に彼の劣等感を説明しても，彼女は“What?”と言う質問を繰り返すばかりでその内容が理解できない[7]．

JOHN:...I was raised to think myself stupid. That's what I want to tell you. (Pause)
CAROL :What do you mean?
JOHN: ...I was brought up, and my earliest, and most persistent memories are of being told that I was stupid.... I could *not* understand.
CAROL :What?
JOHN:The simplest problem. Was beyond me. It was a mystery.

また，新居の契約に気を取られているジョンは予定外の彼女の面会に迷惑しているから，電話の片手間に彼女の悩みを聞き流しそれを深刻に受け止めない．二人の話の途中で妻グレイスから電話があり，新居が契約破棄になりそうな事と昇進祝いのパーティの事が彼に伝えられると，彼はキャロルが彼女の気持ちを話そうとした事を全く失念してしまい，パーティの事をキャロルとの話題にしてしまう．このようなジョンの支配的抑圧的な態度に彼女は絶叫で抗議する．彼女は落第の不安を“I DON'T KNOW WHAT IT MEANS AND I'M FAILING”と，彼女の発言を聞かないジョンへの怒りを“I'M SPEAKING”と怒鳴って表す[8]．彼の抽象的な言葉の意味，例えば“charts”とか“concepts”などのそれを，彼女が理解できな

いのに，ジョンはそれを認めず彼女は理解できるはずだと決めつけるので，彼女は彼の独善性を怒る．彼は，怒った彼女を宥めよう彼女の肩に手を触れると，彼女は“NO”と叫び彼から逃げる[9]．この短く激しい絶叫は，師弟関係の持つ抑圧的な上下関係に対する彼女の frustration の爆発とも言える．

教育の権力的手段は，教師の学生への愛で和らげられ，それは古代ギリシャの愛と知識の交換という教育に見られるとバルトは指摘する[10]．この劇で，ジョンはキャロルに，あくまで好意で，ある密約を提案する．それは彼女が単位取得のレポートを未提出でも，彼との秘密の面談を数回行えば，彼からAの成績評価を得るというものだ．彼女を助けたいと思う彼の好意は不正の取引を彼女に強要する．これは彼の教育理念の弱さを示してはいないだろうか．キャロルは，及第したいという利己的な欲望のために，軽率にもルール違反を承知でこの取引に合意する．彼女は倫理の問題を無視して，安易に教師という権力に従う．このような二人には，互いの信頼に基づいた師弟関係は見られず，そこに存在する教育の権力的手段は学生を抑圧し，利己的にしている．

4　異性の師弟関係

劇の初めでは，ジョンは教師としての公の立場に拘り，個人的関係を避けようとして「私は君の父親でない」と，授業への不安を打ち明けようとする彼女に冷たく言う．しかし，彼女が落第の不安を爆発させ怒鳴ると，その後，彼は態度を変えて，自分の個人的な話をして彼女の信頼を得ようとする．彼女の強い劣等感を彼女から取り除くには，彼は，個人的体験を話す事が良いと考え，他人の行動の理解は，自らの体験を通して行う事が有効だと言う．彼は，彼女に，娘でなく息子に語るように個人的に話したいと以下のように言う[11]．

JOHN:...I'm talking to you as I'd talk to my son....I'm talking to you the way I wish that someone had talked to me. I don't know how to do it, other than to be *personal*,...

ジョンは，女子学生のキャロルとの間に，父と息子の愛による信頼関係を求め，男女間では誤解され易い“personal”という言葉を不用意に使い，彼が彼女と話し合うのは，彼女に，「好意」を感じるからだとさえ言う[12]．また，彼女の怒りを宥めようとする彼は，気安く彼女の肩に触れ彼女に激しく拒絶される．このように，ジョンには彼女を女性と見る態度が無い．古代ギリシャの師弟関係は男性どうしの少年愛に基づいていると，バルトが指摘するように，ジョンの師弟関係にも異性の師弟関係という見方はないようだ[13]．だから，二幕以降キャロルが，彼は性差別主義者だから教員に不適格だとして大学当局に訴えたことに，彼は大きな衝撃を受けるし，彼は偏見の例とし性的な話を安易にする．又，彼女への好意からの特別な配慮であるレポートの免除がなぜ悪いのか理解できない．

師弟関係という上下関係の権力関係では，弟子は，教師に対するコミュニケーションを抑圧され，自己表現もできにくく，保身のために安易に権力へ服従してしまう．そこでは，彼女に個人としての真の独立を促す教育は存在しない．このような状況に加え，ジョンには，キャロルを異性の弟子として見る視点がないために，より彼女を無意識に抑圧してしまい，彼女と彼の間には信頼関係が成立しないままとなる．

5　権力の奪回

ジョンのように自己保身に気を取られ，キャロルに表面的対応をして学生の真意をくみ取れず，確かな教育理念をもてない教師の師弟関係は崩れやすいものだろう．二幕で，ジョンは，師弟関係は human であるべきで学生の主体性を尊重すると，“I'm not the subject”と言うが，一幕でのキャロルへの支配的態度は全く矛盾している[14]．

また，全ての価値が相対化した現代では，学

生は，教師から確固としたいかなる価値観も与えられないと，ハーバート・レイブラーは以下のように指摘する[15].

> The teachers in Mamet's plays all aim at teaching their students about life. Yet, if there are no longer any fixed values in this corrupt world, there remains little knowlodge to pass on to future generations. It also follows that experience, which in traditional societies is valued and treasured, can be of little use here. The very notion of teaching therefore become obsolete, meaningless.

このような師弟関係には，信頼関係は築かれにくいから，キャロルは，ジョンに直接抗議するのでなく，大学当局に彼への非難を訴える彼女は，自分の発言に対し女子学生，大学当局などの集団からの支持を獲得し，発言を権力化する．彼女の個人としての独自の発言はジョンから権力を奪う事になる．彼女は，教師と独立した人格として彼と対決せず，集団という新たな権力の一つに服従し，集団の権力によって彼に反抗していると見ることもできるだろう．相互の真のコミュニケーションの無い，信頼関係の希薄な師弟関係は容易に単なる権力抗争に変化しやすいのでないだろうか．

そのような関係にジョンのいう人間的なものはありえない．

キャロルの反抗の，権力奪回の過程が，二幕以降の中心的な劇の action で，彼女の台詞がジョンのそれよりかなり多くなる．そして，劇の終局になるほど，彼女は「私」という主語でなく「私たち」や「わたしの仲間」という集団意識を示す言葉を多く使う．これは，彼女が集団の力で権力を得て，一幕の彼との力関係がここから逆転した事を表わしているようだ．ハーバート・レイブラーは，弟子の反抗の段階を三段階に分ける[16]．第一段階は教師の言葉を聞き入れず彼の言葉の価値をなくす事である．一幕で，キャロルはジョンの言葉の意味や抗議内容が理解できず，“I DON'T UNDERSTAND.” と絶叫するが，これは教師の言葉の否定であろう[17]．第二段階は自分の意見を主張する事で，一幕で彼女は自分の意見を，“I have never told anyone this...,” と彼に言おうとするが，彼の妻からの電話で話す機会を奪われる[18]．しかし，二幕で，“Those are my own words,” と報告書が彼女の意見だと主張する[19].

反抗の最終段階は，師弟関係の拒否であるが，この段階の過程が，二幕と三幕で丹念に描かれる．二幕の面会は，彼女の彼への好意から行われ，彼女は報告書の事実の正当性を述べ，誤解を解いて和解を提案する彼を拒否する．報告書の罪状は，人種差別，性差別，教科内容の偏向性，不正な成績評価などで，それに対して，彼は学生の意見を尊重している事，教師の人間性尊重や安全で幸福な人生追求の権力を主張し，報告書が誤解だと反論する．が，彼女は彼の彼女への助力を断り，“power”，権力という言葉を始めて使い，彼の権力喪失を以下のように断言し，彼女の立場の優位性が示される[20].

> CAROL :I don't *care* what you feel... DO YOU SEE? You can't do that any more. You. Do. Not. Have. The Power.

また，彼女は別れのあいさつの “Good day” を，ジョンから慣習的の表現の “Nice day” に訂されてもそれを無視する．ジョンは，彼女に，人間らしいコミュニケーションの会話をするための言葉の使い方について，些細な助言をしたにすぎないのだが，彼女の言葉は委員会のそれだと主張し，彼女は権力獲得を宣言する．委員会で申し立てをするために立ち去ろうとする彼女を，彼が引き留めようとすると，彼女は，“LET ME GO” と叫び他人の助けを呼ぶ[21].

このような攻撃的な彼女に対して，何とか話を聞いてもらおうと “Do me the courtesey

to”と懇願する彼のこの言葉は，彼と彼女の位置の逆転を明示している[22]．

三幕は，裁判所の職員に止められているにも拘らず，彼女は，既に解雇の決定した彼の申し出でを受けて，彼に彼の悪を確認させる為に会う．起訴事実で二人は対立し，彼女があくまでそれを事実だと主張すると，彼は，初めて“ALL RIGHT”と叫ぶが，これは彼が弱者の立場に，一幕のキャロルと同じ立場に追いつめられているからであろう[23]．彼女の面会の承諾に，ジョンはこの劇で初めて“Thank you”と感謝の言葉を使う[24]．幾分以前より彼女に優しくなり，彼女の意見に同意し，“Yes”と言うことが多くなる[25]．彼女が権力や復讐を求める若者であるとジョンが思っている事，権力が憎悪を生み自由な討論を奪うことなどを彼女が述べると，それを彼は認める．だが，法的にも社会的優位に立った彼女は，“IT'S NOT FOR YOU TO SAY”と怒鳴り一方的に彼の話を封じ，彼の意見を理解しようとしない[26]．一幕と同様に，彼女は本音を絶叫で表し，彼の本を取り出し，信念の無さを非難して，“YOU BELIEVE IN NOTHING”と叫ぶ[27]．これはジョンだけでなく，絶対価値を失った現代人の苦悩の叫びとも取れ，作者の台詞の感覚は鋭い．また，彼が彼女への性的虐めを否定すると，被害者の悩みを理解すべきだといい，“I WANT UNDERSTANDING”と怒鳴り彼の理解力の無さを非難する[28]．これは，一幕で彼女が彼の言葉を理解できず，“I DON'T KNOW WHAT IT MEANS”と怒鳴る時と立場が全く逆である[29]．“if”を“given”にするように彼女は彼の言葉遣いさえを訂正し，彼はそれに従う[30]．これは，彼が，キャロルに“Nice Day”という表現に訂正された際，彼女がそれを無視した態度と対称的である．三幕での彼女の抑圧的行動は，一幕の彼の行動と同じようなものである．

だが，劇の終局で，ジョンは彼女の反抗に対し反撃を開始する．彼が，失業が彼の死を意味すると言うと，彼女は彼の本の発禁を条件に告訴を取り下げ，職を保証する取引を持ち出す．この取引は彼女の友情からだというが，一幕の彼の好意による不正取引と同質ではないか．彼女の場合は及第，彼の場合は仕事が，それぞれの人生の安全性が交換条件になっていて，二人とも自尊心を失うことになるから，彼は彼女と違い，本の発禁処分に怒り彼女を部屋から追いだそうとする．彼は，自己，家庭，仕事への責任を再確認して，取引の申し出を断り，失業しても自尊心を大切にする．「私たち」，「私たちの集団」という言葉を使い権力を誇示し，集団の力におもねる彼女と，彼女の属する集団の邪悪さを以下のように断言する[31]．

JOHN:...You're *dangerous*, you're wrong and it's my job...to say no to you.... You want to ban may book? Go to hell, and they can do whatever they want to me.

そして彼の優位性の最後の誇示として，今度は，法的正当性を持ち権力者である彼女への報復として，彼は彼女に暴力をふるう．彼の弁護士からの電話で，彼は彼女の仲間が強姦未遂で彼を告訴した事を知る．また，妻からの電話で，彼が妻を“baby”と呼ぶとそれを差別用語だとキャロルに彼女に指摘されると，ついに彼の怒りは爆発する．彼は彼女を掴み，殴り，床に倒して憎悪の言葉で罵る．暴力行為に伴い，彼は，“bitch”や“cunt”というような罵り言葉で彼女を呼び，彼女は彼の罵りに，“Yes. That's right”と二度答えて，幕となる[32]．キャロルが彼から権力を奪う事で得たものは，彼からの憎悪だけであったのか．この「その通り」というリフレインは，何が正しいのか，何が正義か，果たして正義が在るのかという，幾つもの問を観客に与える重要なものでもあろう．

6　結　論

従来知的であるはず師弟関係が，ある種の権

力抗争の場に見えるのは，二人の登場人物のどちらもが，彼らの身の安全，保身を第一に考え，彼らの egoism を越える価値観を得ていないことに起因していないだろうか．彼らは，自己の利益に執着するあまり，自分の行動の意味や他人へのその影響が見えていない．キャロルは，進級という個人的理由で，担当の教師をいとも簡単に社会的に追放してしまう．彼女は彼の教育は，“testing, questioning, flirting”，だけで無節操だと批判にするばかりで，彼を理解しようとしない[33]．彼と信頼関係を築く努力もしないで，彼女の不満に同意する集団の力，権力で彼を屈服させる．ジョンは，彼の昇進や家作りという個人生活の幸福に拘るあまり，彼女の劣等感を軽視し，悩みを理解できず，誠実な学生指導を怠り，不名誉な失職に追い込まれる．彼女に不正な取引を安易に言い出す彼に，確たる教育理念が在るとは言いがたいし，彼は中産階級になるための手段にすぎない現代の高等教育制度を批判するが，彼自身がその階級への執着で皮肉にも窮地に落ちる．

自己の利害しか見えない，現在のエゴセントリックな人々の発想に，利益追求という資本主義社会の市場原理は影響力を持ちやすいのだろう．取引，有利な契約という行為は，この市場原理の現れの一つであり，自尊心の放棄と身の安全を交換する取引が，この作品の師弟関係にも現れている．この取引に同意したキャロルは，自尊心を権力を得る事で取り戻そうとするが，結果は，彼から憎悪感を得ただけだ．一方，自尊心のために取引を拒否したジョンは，愛する仕事，生きがいを失うので，彼の人生も満たされていない．彼ら二人の利己主義により，性的嫌がらせの誤った裁きが生まれ，真の正義は否定される．そして彼らの間には，互いの不信感しか存在してない．

ハーバード・レイブラーが以下に指摘するように，作者は，現代資本主義社会に汚染された人々の悪は，それに対する人間の無関心さ，無責任さによると見ているらしい[34]．

...if man is shown as alienated and corrupted by the tainted value system of capatalism, he is not depicted as a victim of the economic order..., the plays emphasize his responsibility in propagating and nurturing corruption:Mamet's moral, again and again, is that people are absurdly their own tormentors.

この劇では，ジョンとキャロルは，師弟関係というある権力関係の場で，社会を見方につける権力抗争，即ち社会正義を求める戦いを展開する．それはキャロルのいう“sexual harassment”と，ジョンの教師という地位の妥当性の戦いではあるが，観客に，より明かに見えて来るは，彼らの社会的に無責任な利己主義が，正義を歪める一つの悪になる過程ではないだろうか．

注

(1) Pascal Hubert-Leibler. “Dominance and Anguish:The Teacher-Student Relationship in the Plays of David Mamet” In *David Mamet:A Casebook*. Ed. Leslie Kane. New York:Garland Publishing, Inc., 1992, *p.69*.

(2) *David Mamet.Oleanna*, New York: Vintage Bolls, 1992, p.29.

(3) Pascal Hubert-Leibler. “Dominance and Anquish,” pp.70-73.

(4) Ibd., pp.75.

(5) David Mamet.*Oleanna* . pp.12, 16, 17, 22, 35, 37.

(6) Ibd., pp.67, 68, 76.

(7) Ibd., p.16.

(8) Ibd., pp.14, 30.

(9) Ibd., p.36.

(10) Pascal Hubert-Leibler. “Dominance and Anauish,” p.76.

(11) David Mamet.*Oleanna*. p.19.

(12) Ibd., p.21.

(13) Pascal Hubert-Leibler. "Dominance and Anguish," p.76.
(14) David Mamet.*Oleanna*. p.53.
(15) Pascal Hubert-Leibler. "Dominance and Anguish," p.82.
(16) Ibd., pp.79-80.
(17) David Mamet.*Oleanna*. p.36.
(18) Ibd., p.38.
(19) Ibd., p.49.
(20) Ibd., p.50.
(21) Ibd., p.52.
(22) Ibd., p.57.
(23) Ibd., p.63.
(24) Ibd., p.61.
(25) Ibd., p.61.
(26) Ibd., p.70.
(27) Ibd., p.67.
(28) Ibd., p.71.
(29) Ibd., p.14.
(30) Ibd., p.73.
(31) Ibd., p.76.
(32) Ibd., p.80.
(33) Ibd., p.66.
(34) Pascal Hubert-Leibler. "Dominance and Anguish," p.83.